

江吏部集試注（四）

木戸，裕子
鹿児島県立短期大学助教授

<https://doi.org/10.15017/10352>

出版情報：文献探究. 37, pp.15-24, 1999-03-31. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：



江吏部集試注(四)

木戸 裕子

(承前)、(三)は『鹿児島県立短期大学紀要』第二二号に掲載している。

凡例

一、底本は板本群書類従を用い、後述の諸本により適宜異同を挙げた。

一、校異では、逐一の異同を挙げるのではなく、本文解釈に関わるものだけを記した。したがって、異体字については挙げていない。

一、校異に用いた諸本と略号は次の通りである。

内閣文庫(旧浅草文庫)本(内) 山口県立図書館本(山)

陽明文庫本(陽) 祐徳稻荷本(祐)

静嘉堂文庫本(静) 神宮文庫本(神)

国会図書館本(国) 無窮会図書館本(無)

東大図書館(E45 656)本(東A)

東大図書館(旧南葵文庫)本(東B)

岡山大図書館本(岡) 島原松平文庫本(島)

東北大図書館本(東北)

多和文庫本(多)

名古屋市立鶴舞中央図書館本(鶴)

本朝文粹(新日本古典文学大系)一(粹)

本朝麗藻(校本本朝麗藻)一(麗)

一、本文の漢字はできるだけ現行の字体に統一した。ただし、次の漢字は底本の字体を尊重した。

煙・烟 花・華 叢・藜 窓・牕など。

一、割注など小書の部分は「」に入れて示した。

一、訓読文は必ずしも平安時代の訓みによるものではないが、古辞書類を参考にした。

※本稿では巻上十二番から十五番までの詩を取り扱う。

十二 今年四月一日陰雨。八日大雨。 今年四月一日より陰雨。八

信東方朔之前言。心怨大旱*。 日大いに雨ふる。東方朔

入五月以来久不雨*。

十一日公家班幣諸社祈雨*。

又是月相府依例被修法華三十講*。

於是

皇沢雲霑。忽救稼穡之艱難。

法音雨洒。自致陰陽之燮理。

於戲君臣合体。朝野歛心*。

僕以紙為良田*。以筆為耒耜。

不独弄風月誇翰林主人之名*。

亦欲慕循良頭丹州刺史之志*。

以絕句二首題東閣之壁。

の前言を信じ、心に大旱を

怨む。五月に入りて以来久

しく雨ふらず。十一日、公

家幣を諸社に班し雨を祈

る。又是の月相府例に依り

て法華三十講を修せらる。

是に於いて、皇沢雲霑ひ、

忽ちに稼穡の艱難を救ひ、

法音雨洒き、自ら陰陽の燮

理を致す。ああ、君臣合体

し、朝野歛心す。僕紙を以

て良田と為し、筆を以て耒

耜と為す。独り風月を弄び

翰林主人の名を誇るのみな

らず亦、循良を慕ひ丹州刺

史の志を頭はさんとす。絶

句二首を以て東閣の壁に題

す。

三十講時知仏恩

是是旱天霖雨用

君臣合德感乾坤

三十講の時仏恩を知る

是れ旱天霖雨の用なるべし

君臣徳を合せて乾坤を感ぜしむ

【校異】

1. 早一早(鶴) 2. 雨一雨(島) 3. 祈一所(鶴)

4. 月一ナシ(鶴) 5. 相府一左相府(国)

6. 洒一酒(祐)一灑(内・国・島・多)

7. 燮一変(島・多)一変(ミセケチシテ燮ト傍書)(内・静)

8. 体朝野歛一ナシ(京) 9. 田一由(祐・鶴)

10. 翰一朝(鶴) 11. 循一備(国・鶴)

12. 志一忠(内・島・多) 13. 鋤一挿(底本(内・陽・

東A・島・山・神二依ッテ改ム)一鋪(京・祐)

14. 徳一ナシ(陽・京・祐・山・神・賀・鶴)

15. 遇一過(静・京・神・賀・鶴)

16. 明一ナシ(陽・京・祐・山・神・賀・鶴)(二句各脱一

字歟ト頭注) 17. 土一土(京・祐・神・賀)

18. 十ー千(底本・内・陽・国・東AB・島・山・祐・岡・

東北・多)(静・京・神・賀・鶴二依ッテ改ム)

19. 早一早(祐)一早(ミセケチシテ早ト傍書)(東A)

【押韻】

×××○○×× ×○○○××○○○ (上平声之韻)
○○○○××○○○ (上平声之韻)
×○○×○○× ×○○○○××○○○ (上平声之韻)

一千載后祈神社

一千載の后神社に祈る

荷鋤染毫歌徳政 鋤を荷ひ毫を染めて徳政を歌ふ

為儒為吏遇明時 儒と為り吏と為りて明時に遇ふ

予期吾土如雲稼 予め期す吾が土雲の如き稼なるを

高詠樂天賀雨詩 高く詠ぜむ樂天賀雨の詩

×○××○○×
×××○○○××
○○○○×××
○○×××○○◎(上平声痕韻)

【製作年次】

詩題の「丹州刺史之志」から、本詩の制作時に匡衡は丹波守であったことがわかる。匡衡が丹波守に補されたのは最晩年の寛弘七年三月三十日。「丹波守業遠依病辞退、以尾張守匡衡遷任(件朝臣御博士、任遠国、難候朝夕、又兼式部大輔、往還遠国、仍改任)」へ「御堂関白記」寛弘七年三月三十日条。また題中の「今年四月一日陰雨」の記述に当てはまるのが確認できるのは寛弘七年のみ。「依物忌重籠居、従夜部雨終日」へ「御堂関白記」寛弘七年四月一日条。同じく題中に見える寛弘七年の道長郎法華三十講は、五月四日から二十五日にかけて行われた。へ「御堂関白記」ただし、題中には「十一日公家班幣諸社祈雨」とあるが、『御堂関白記』によれば、朝廷の奉幣が行われたのは寛弘七年五月十日である。「諸社奉幣、内大臣行之」へ「御堂関白記」寛弘七年五月十日条。以上のことから本詩の製作時期は寛弘七年五月中旬から六月にかけてである可能性が高い。

【語釈】

◎陰雨〓雨降り。又、長雨。「葺廬備陰雨 補褐防寒歳」へ「白氏文集」四七八「村居臥病、又一首」へ
◎東方朔之前言〓未詳。東方朔の天候に関する発言としては、「旱頌」「東方朔占」がある。「四月無三卯、旱。種麻」へ「東方朔

占」『全漢文』卷二五

◎法華三十講〓法華經二十八品に無量義經と観普賢經を加えた三十卷を講ずる法会。道長郎での法華三十講は、長保四年三月、長保五年五月(以上『権記』)、寛弘二年五月、寛弘三年五月、寛弘四年五月、寛弘五年四月〓五月、寛弘六年四月〓五月、寛弘七年五月、寛弘八年五月(以上『御堂関白記』)以下道長の晩年まで、はじめの一、二を除き、ほぼ毎年五月中に催された(寛弘元年五月は法華八講)。「世の始めよりして、年ごとの五月には、やがてその月の朔日より始めて晦日までに、無量義經より始めて、普賢經に至るまで、法華經二十八品を、一日に一品当てさせたまひて、論議にせさせたまふ」へ「柴花物語」卷十五「うたがひ」
◎皇沢〓天子のめぐみ。「於是 皇沢豊沛 主恩満溢」へ「文選」卷五一「四子講徳論」王子淵「皇沢之平施、在汚隆而必遍」へ「本朝文粹」卷八「早春侍宴賦陽春詞応製序」都良香
◎稼穡〓作物を植えることと收穫すること。農業。「君子所其無逸。先知稼穡之艱難、則知小人之依」へ「書經」無逸
◎法音〓説法の声。仏の教え。「十余年来、畿内畿外、或年之二季四季、或月之十有四日、修習普賢行、演説一乘經。昼夜相統、法音不断」へ「本朝文粹」卷十二「普賢菩薩讚序」具平親王
◎陰陽之燮理〓天地が調和すること。陰陽は天地の間にあつて万物を生ぜしめる二つの気。燮理はやわらげ治めること。「玆惟三公、論道經邦。燮理陰陽」へ「書經」周官
◎君臣合体〓主君と臣下とが一心同体となる。「合体之義、既重於曩時」へ「本朝文粹」卷十四「宇多院為河原院左大臣没後修

諷誦文「紀在昌」

◎以紙良田以筆耒耜。文筆の業を以て生計の手段とする。農業生産は国の産業の基本だが、匡衡は自らの学問が農業に匹敵するものとして誇りにしていた。「匡衡不種一頃之田、積学稼穡、為口中之食、不採一枝之桑、織文章為身上之衣」(『本朝文粹』卷六「申越前尾張等守状」大江匡衡)

◎良田。『良田無晚歲 膏澤多豐年』(『文選』卷二四「贈徐幹」曾子建)

◎耒耜。すき。「陳良之徒陳相、与其弟辛、負耒耜而自宋之滕。曰、聞君行聖人之政。是亦聖人也。願為聖人氓」(『孟子』滕文公章句上)「耒耜斯耕 悠悠嫗秦」(『文選』卷一九「諷諫」韋孟)

◎翰林主人。文章博士の唐名。

◎循良。法に従って善良なこと。又その人。「顧循良菲薄」(『文選』卷三〇「和謝宣城」沈約)「慎扶循良吏 令其長子孫」(『白氏文集』八八「贈友詩五首」その四)

◎東閣。東の小門。東閣は東閣に同じ。漢の丞相公孫弘は、邸の東の小門を開いて賢人を招いた。ここは道長の邸をいう。「漢書、公孫弘為丞相、開東閣以招賢人。後封平津侯。丞相封侯、自弘而始也」(『書陵部本』「蒙求」四九〇「漢相東閣」)

◎荷鋤。鋤をになう。農業に従事する。「雖有荷鋤倦 濁酒聊自適」(『文選』卷三一「雜體詩三十首陶徵君」江淹)「負石荷鋤、尽力底功」(『本朝文粹』卷二「意見十二箇条」三善清行)

◎染毫。筆を染める。文章を書く。染筆、染翰に同じ。「墨客染毫 莫不夜月之麗藻」(『本朝文粹』卷九「早春侍内宴。賦聖

化万年春応製「大江朝綱」

◎徳政。めぐみ深い政治。「皆人君徳政之所致也」(『詩経』「周頌譜」)「夫徳政防邪、善言招福」(『本朝文粹』卷二「減服御常膳并恩赦詔」菅原文時)

◎如雲稼。穀物が雲のごとくみちみちている。「莫道如雲稼 今秋雲不如」(『白氏文集』二六一三「大和戊申歳。大有年。詔賜百寮出城觀稼。謹書盛事以俟采詩」)「万里如雲稼 重陽就日晴」(『菅家文章』卷一「重陽侍宴。賦景美秋稼。応製」)

◎樂天賀雨詩。『白氏文集』一「賀雨詩」。「皇帝嗣宝曆 元和三年冬 自冬及春暮 不雨旱熾熾 上心念下民 懼歳成災凶 遂下罪己詔 殷勤告萬邦 帝曰予一人 繼天承祖宗 憂勤不遑寧 夙夜心忡忡 元年誅劉闢 一挙靖巴邛 二年戮李錡 不戰安江東 顧惟眇眇徳 遽有巍巍功 或者天降沴 無乃儆予躬 上思答天戒 下思致時邕 莫如率其身 慈和与俟恭 乃命罷進獻 乃命賑饑窮 有死降五刑 責已寛三農 宮女出宣徽 厖馬減飛龍 庶政靡不舉 皆出自宸衷 奔騰道路人 僂僕田野翁 歎呼相告報 感泣涕沾胸 順人心悅 先天天意從 詔下纒七曰、和氣生沖融 凝為悠悠雲 散為習習風 晝夜三日雨 凄凄復濛濛 萬心春熙熙 百穀青芄芃 人爰愁為喜 歳易儉為豊 乃知王者心 憂樂与衆同 皇天与后土 所感無不通 冠珮何鏘鏘 將相及王公 蹈舞呼萬歳 列賀明庭中 小臣誠愚陋 職忝金鑾宮 稽首再三拜 一言獻天聰 君以明為聖 臣以直為忠 敢賀有其始 亦願有其終」

◎早天霖雨用。早暈の時に長雨が救いとなるごとく、臣下が君子を補佐し助けること。

「若歳大旱、用汝作霖雨」《書經》説命上

◎乾坤 天と地。「乾為天、坤為地」《易》説卦、「聖上德籠乾坤 仁被動殖」《本朝文粹》卷一一「九日侍宴同賦寒菊戴霜 抽応製」大江朝綱

【通釈】

今年の四月一日以来長雨で、八日には大雨が降った。私は昔東方朔が残した言葉信じ、密かに旱魃を心配した。

(思ったとおり) 五月に入ってから久しく雨が降らない。十一日に朝廷は諸社に幣を供えて雨を祈った。又この月は左大臣道長様が恒例により法華三十講を行われた。ここにいたって、天子のめぐみは雲となって天を潤し、たちまち農業の苦難をお救いになり、また(道長様が催された) 仏の教えの声は雨となって大地にそそぎ、天地自然を調和せしめた。

ああ、君主と臣下が一心同体となり、全ての人々が歓喜している。

私めは(実際に農業に従事しているわけではなく) 紙を良田として筆を鋤として文章を書いております。それはただ、詩文を弄び文章博士の名を誇るためだけではございません。同時に法に従う良き官吏でありたいと願ひ、丹波守としての志を表明したいと願うことなのでございます。そこで、絶句二首を道長様のお屋敷に記しました。

鋤を背負い、筆を染めて恵み深い政を歌う。

儒(文章博士)として吏(丹波守)としてめぐみの御代に会う、

きつと秋には作物が雲の如く大地に満ち満ちていよう。高らかに白楽天の「賀雨詩」を詠じようではないか。

千年万年と続く我が君が神社にお祈りになった(だから雨が降った)。

法華三十講の時に仏の恩を知った(仏の恵みの雨が降った)。これこそ旱天霖雨の用というべきである。君主と臣下とが徳を合わせて天地を感じしめたのだから。

十三 冬夜守庚申同賦看山有小雪(以疎為韻)

排戸卷簾送眼居 戸を排き簾を巻き眼を送りて居れば

山頭小雪暁来疎 山頭の小雪暁このかた疎なり

衡峯残月孤輪半 峯に衡める残月孤輪半ばに

触石寒雲一臥余 石に触るる寒雲一臥余れり

貞女峽裡施粉黛 貞女峽の裡に粉黛を施し

大夫松冷著銀魚 大夫松冷かにして銀魚を著く

昔堆牕裏今遙点 昔牕の裏に堆けれども今遙かに点ずるのみ

尼嶺迷途莫弃予 尼嶺途に迷ふも予を弃つること莫かれ

【校異】

1. 庚一唐(賀) 2. 山一經(ミセケチシテ山ト傍書)(唱陽)

3. 暁一脱(国・島) 4. 衡一御(東A・京・鶴)

5. 牕一窓(国・島) 一窓(内・陽・静・東AB・山・神・賀)

・鶴

【押韻】

○ × × ○ × × (上平声魚韻)
 ○ ○ ○ × ○ × ×
 ○ × × × ○ × ×
 × ○ ○ × × ○ ○ (上平声魚韻)
 × ○ ○ × × ○ ○ (上平声魚韻)
 × ○ ○ × ○ × × (上平声魚韻)

【語釈】

- ◎ 看山有小雪句題の典故未詳。
- ◎ 排戸戸を押し開く。「排玉戸而颺金鋪兮」《文選》卷七「甘泉賦」揚雄「排戸遥看漢文去 卷簾斜望雁橋橫」《本朝麗藻》卷下「暮秋於左相府宇治別業即事」藤原道長
- ◎ 卷簾簾を巻き上げる。「弘簾卷簾坐 清風生其間」《白氏文集》三五「一四「小閣閑坐」
- ◎ 送眼視線を巡らす。眺める。「幾処樓中送眼有池塘之景 誰家林表凝情忘草樹之姿」《全唐文》卷七七〇「芙蓉峰賦」王棨「送眼衡山雁一行」《本朝無題詩》卷五「暮秋即事」藤原明衡
- ◎ 銜峯残月月が山の端に沈みつつある様子をいう。「竹霧曉籠銜嶺月」《白氏文集》九一一「庾樓曉望」『千載佳句』上「春曉」『和漢朗詠集』上「霧」に所収「觸石春雲生枕上 銜嶺暎月出窓中」《和漢朗詠集》卷下「山家」橘直幹
- ◎ 觸石寒雲山の気が岩石に触れて雲となる。「岡巒糾紛 觸石吐雲」《文選》卷四「蜀都賦」左思
- ◎ 貞女峽貞女が一夜にして石と化したという伝説のある峽。「王

韶之始興記曰、一略一中宿県有貞女峽。峽西岸水際有石。如人形。状似女子。是曰貞女。父老相伝、秦世有女数人、取螺於此。遇風雨昼昏。而一女化為此石」《芸文類聚》地部「峽」

◎ 粉黛おしろいとまゆずみ。化粧。ここでは雪をかぶった山の様子を化粧を施した貞女に見立てた。

◎ 大夫松秦の始皇帝が雨宿りをした松に大夫の官を授けた故事。「漢官儀曰、秦始皇上封太山。逢疾風暴雨、頼得松樹。因復其道、封為大夫松也」《芸文類聚》木部上「松」

◎ 銀魚銀色の魚袋。魚袋は五位以上の官人が正式な礼装の時に着けた魚型の飾り。四位と五位の魚袋は銀色だった。ここでは山の松に積もった雪を銀色の魚袋に見立てた。「凡魚袋者、参議已上、及着紫、諸王五位已上金装、自余四位五位銀装」《延喜式》卷四一「彈正台」「節会にはかんだちめ、殿上人、帯に魚袋をつく。かんだちめは金なり、殿上人のは銀なり」《滿佐須計装束抄》二

◎ 堆牖裏窓辺に積もった雪。その雪明かりで読書する。苦学すること。「蒙求」「孫康映雪」の故事を踏まえる。「孫氏世録曰、孫康、家貧允油、常映雪讀書。少清介、交遊不雜。後至御史大夫也」《書陵部藏「蒙求」一九三「大学の窓に光ほがらかなる朝は眼も交はずまぼる、光を閉ぢつる夕べは、くさむらの蛍を集め、冬は雪を集べて部屋に集べだること年重なりぬ」
 《うつほ物語》「祭の使」《師披雲衲臥巖戸 我向雪牖在翰林》《江吏部集》卷中「和石山平上人述懷之絶句」

◎ 尼嶺尼山、尼丘に同じ。孔子の母が尼山に祈って孔子を得た。孔子その人を指す場合もある。「紇与顔氏女野合、而生孔子。

禱于尼丘、得孔子。魯襄公二十二年、而孔子生。生而首上圩頂。故因名曰丘云。字仲尼、姓孔子。《史記》「孔子世家」《吾王本自久相樂 尼嶺光輝顧眇生》《本朝麗藻》卷下「遙山斂暮煙」大江以言《照湖山兮絕倫 更繼尼嶺之日》《江吏部集》卷下「重陽侍宴清涼殿。同賦菊是花聖賢製詩」

◎迷途Ⅱ学問の道に迷う。「長保春風初促駕 寛弘冬雪更迷途」《江吏部集》卷中「冬日於州廟賦詩」

【通釈】

冬の夜に庚申を守り、皆で「山に少しばかりの積雪を見る」という題で詩を作る。「疎という字を韻とする」

戸を押し開け簾を巻き上げ辺りを眺め渡していると明け方になって山の頂にはわずかに雪が積もっている。

その様は沈みかけた有明の月が山から半ば姿を見せているかのよう。

また、山の気が石に触れて生じた冷たい雲が頂きに懸かっているかのよう。

（山中の溪谷に積もった雪は）あの貞女峽が施す化粧のように見え、

（山の松に積もった雪は）大夫の松が腰に帯びる銀の魚袋のようにに冴え冴えと輝いているだろう。

雪はかつて私の部屋の窓辺に堆かったが、今は遙かな山の頂にわずかに積もっているのを眺めるだけ（私もかつては苦学していたが、今は怠っている）。

孔子とその学よ、私が学問の道に迷ってもどうぞ見捨てないで欲しい。

十四 雪是先春花

乘輿廻看白雪朝
 恰歎花色先春嬌

興に乗じ廻り看る白雪の朝
 恰も花色を歎くがごとくして春嬌に先んじたり

東風未報梅唇咲
 朔漠猶陰柳絮飄

東風未だ報ぜざるに梅唇咲み
 朔漠猶ほ陰にして柳絮飄る

拾欲薰衣非暖氣
 折難挿首是寒霄

拾ひて衣に薰ぜんとするも暖氣に非ず
 折りても首に挿難きは是れ寒霄なればなり

追嘲宋日豊年瑞
 詠徳歌功事帝堯

追ひて嘲る宋日豊年の瑞
 徳を詠じ功を歌ひ帝堯に事へむ

【校異】

- 1. 先―光（静・東A・鶴）
- 2. 漠―漢（静・東B・鳥・山・祐・神・賀・鶴）
- 3. 衣―夜（東A）
- 4. 挿―挑（内）
- 5. 是―足（鶴）
- 6. 霄―宵（内・陽・東B・多）
- 7. 嘲―期（ミセケチシテ
- 8. 宋―宋（昔ト傍書）（静）

【押韻】

○×○○○××
 ○×○○○××
 ○×○○○××
 ○×○○○××

○○××○○× ××○○×××× (下平声宵韻)
 ××○○○○×× ×××××××× (下平声宵韻)
 ○○××○○× ××○○×××× (下平声蕭韻) 同用

【語釈】

◎雪是先春花^ハ詩題の出典未詳。

参考：長保三年十月二十三日 内裏庚申。左大弁献題「霜樹疑

春花」宮内丞源道济序者 同日 御書所作文。題「菊残雪花中」

序者為政。(『権記』)

寛弘元年十一月二十七日 御前作文。題「雪是遠山花」(『御

堂閑白記』)

◎乘興^ハ興にまかせる。『蒙求』「子猷尋戴」の故事に基づく表

現。↓四「七言 歳暮於藤少侯書齋守庚申同賦明月照積雪各分

一字応教」「雪時乘興」の項参照。

◎春嬌^ハ春のなまめかしさ。「把酒思閑事 春嬌何処多」(『白氏

文集』三〇九「把酒思閑事又一首」)

◎東風^ハ春を告げる風。「孟春之月、東風解凍」(『礼記』月令)

◎梅唇^ハ梅の花の形を人の唇に見立てたもの「誰謂花不語 輕漾

激兮影動唇」(『和漢朗詠集』上「花」)

◎朔漠^ハ北方の砂漠の地。「河海生雲、朔漠飛沙」(『文選』卷一

三「雪賦」謝惠運)

◎暖氣^ハ暖かな空気。「暖氣留中属綺羅」(『菅家文章』卷二「早

春侍宴仁寿殿、同賦認春。応製」)

◎寒霄^ハ冷たいみぞれ。霄はみぞれ。「晝仗親雲陸 寒霄突禁營」

(『全唐詩』五五六「送武陵王將軍」馬戴)

◎追嘲^ハ過去のことを思い出して嘲る。「追嘲奔走買虚名」(『本

朝麗藻』卷下「閑居無外事」源道济)

◎宋日豊年瑞^ハ一尺ほどの積雪は豊年の瑞兆。南朝の宋の大明年

間の元日、宮殿に雪が降り、皇帝がこれを嘉瑞とし、群臣が雪

花詩を作った故事。「大明中元日、雪花降殿庭。右將軍謝莊下

殿集雪衣白。上以為嘉瑞。群臣皆作雪花詩」(『宋書』(『太平

御覽』天部一二「雪」所収)「盈尺則呈瑞於豊年」(『文選』

卷一三「雪賦」謝惠運)

◎詠徳歌功^ハ君の徳をたたえて歌う。「変風詠徳 詩人歌而到今」

(『本朝文粹』卷五「為清慎公辞右大臣第二表」大江朝綱)「歌

徳浴恩仰聖明」(『江吏部集』卷下「落花渡水舞」)

◎帝堯^ハ中国古代の聖帝。ここは天皇(一条帝か)を堯に比して

いう。「帝堯姑射華顔少 不用紅勻上面来」(『菅家文章』卷五

「三月三日、同賦花時天似醉応製」)

【通釈】

雪は春に先立つ花

雪の朝、興にまかせて周囲を見渡せば

あたかも春の花と見まがうほど艶やかな雪の色。

(枝の雪は)まだ東風が春を告げたわけでもないのに口元を綻

ばせる梅の花。

(舞い落ちる雪は)今なお陰鬱な北の空にひるがえる時ならぬ

柳の花芽。

地面に落ちた(梅の花びらのような)雪を拾って衣にかおりを

江朝綱

- ◎王春〓周王の正月。ここでは単に正月の意。「建武王春 更始 纓偷甲子」〓菅家文章〓卷一「八月十五夜、敵閣尚書授後漢 書畢。各詠史得黄憲」〓本朝文粹〓卷九にも所収〓王春芳 節始相迎」〓本朝無題詩〓卷四「早春言志」藤原周光〓

- ◎光陰〓歲月、時間の流れ。「聞蟬聽鶯感光陰」〓白氏文集〓一六一「陵園妾」〓

- ◎温煦〓和らいで暖かなこと。「冬閨温煦 夏室含霜」〓全梁文〓 卷一「七勸」簡文帝〓

- ◎翰林〓ここでは翰林主人、翰林学士に同じ。文章博士の唐名。

- ◎四品新袍〓一条朝頃から四位以上は袍の色がすべて黒に近い濃い色になった。五位の袍の色は緋色。

- ◎道〓こは文章道を指す。

- ◎三官〓文章博士、東宮学士、式部権大輔の三つの官職。

- ◎寒江〓寒々とした江。江字に匡衡の姓「大江」を響かせて、大江家の窮状を訴える。「舜河添潤寒江岸」〓江吏部集〓卷中「喜 愚息举周賜学問料。聊写所懷寄呈廊下諸賢」〓拙稿「江吏 部集」に見られる言語遊技的表現について」〓語文研究〓第 六四号〓

- ◎潜魚〓水底に潜んでいる魚。「潜魚躍清波 好鳥吟高枝」〓文 選〓卷二〇「公讌詩」曹植〓栖鳳安於桐 潜魚樂於藻」〓白 氏文集〓五七四「翫松竹二首」その一〓

- ◎枯木〓「日暮声未和 寂寥一枯木」〓全唐詩〓卷三五四「調 瑟詞」劉禹錫〓

- ◎好鳥〓美しい鳥「遊蜂遂不去 好鳥亦棲来」〓白氏文集〓五

- 四八「東坡種花二首」其の一〓

- ◎萬心〓萬民の心。「国家俗反九首、仁蒙萬心」〓本朝文粹〓卷 三「松竹对策」藤原広業〓

- ◎抃悦〓手を打って喜ぶ。「凡在氓隸、莫不抃悦」〓全宋文〓卷 四六「征北世子誕育上疏」鮑照〓

- 【通釈】

- 春の日、左大臣郎において、皆で「春に逢うのはただ喜ばしい 気のみ」という題で詩を作る。

- めでたい御代の正月、喜ばしい気を感じるにつけても、歳月の 流れを思って感慨深い。

- 暖かな光は、その中でも特に翰林（文章博士）にそそがれる。 四位となって新しくなった袍は文章道が尊ばれるべきものであ ることにあざわしく、

- 文章博士、東宮学士、式部権大夫の三つの官を同時に兼帯でき るのは、主上や道長様の御恩が深ければこそである。

- 寒々とした川にも春が来て次第に温まり、水底に潜んでいた魚 も躍り上がり、

- 冬枯れの木にも春が来てようやく芽吹き、美しい鳥がさえずる （そのように不遇だった大江家にもめぐみの春がやってきた）。 君と臣とが一心同体となるこの日に皆が競って集い逢う。

- すべての民は君のありがたいお心に手を打って喜んでい

- （きど ゆうこ・鹿児島県立短期大学助教授）

- （きど ゆうこ・鹿児島県立短期大学助教授）

- （きど ゆうこ・鹿児島県立短期大学助教授）